様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　３月３１日現在

研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2005～2008
課題番号：17202021
研究課題名（和文）　日中古代墳墓副葬品の比較研究

研究課題名（英文）　A Comparative Study on Burial Goods Unearthed from Ancient Tombs in Japan and China

研究代表者
金田　明大（KANEDA　AKIHIRO）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター・主任研究員
研究者番号：20290934

研究成果の概要：古墳時代を中心とする日本列島各地の墳墓副葬品等にみられる渡来系遺物や外来的要素のなかで、中国を源流とするものついては、鏡や帯金具の一部のように直接もたらされた場合と武器・武具や馬具のように韓半島を経由した場合があることが明らかになった。また、古墳時代における騎兵装備の導入については、受容する側が選択的に受け入れるといった状況であったことを明らかにし､東アジア各地域の交流のあり方の一端を知ることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	6,500,000	1,950,000	8,450,000
２００６年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
２００７年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
２００８年度	6,900,000	2,070,000	8,970,000
年度			
総　計	24,600,000	7,380,000	31,980,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：馬具、騎兵装備、金銅製品、三燕

１．研究開始当初の背景

日本列島の国家形成過程にあたる弥生時代、古墳時代に、対外的な交流があったことは、中国の史書等のみならず、日本列島の墳墓等から渡来系遺物が出土することによってもうかがい知ることができる。しかし、それらの源流が、韓半島にあるのか、あるいは中国の東北地方や中原地域までたどれるのか、手がかりとなる資料が乏しい状況であった。

一方、日本の古墳の副葬品にみられる金銅製品について、その製作技術、製作工程を検討すると、従来、渡来系とされてきた金銅製品のなかには、個々の製品としてもたらされたものではなく、技術工人が渡来して、日本で製作したものがあると考えられるにいたった。さらに、近年、年輪年代学の成果から弥生時代の年代観の見直しが議論されるなかで、有機質を素材とした武具類のように、従来、年代的に乖離していた日中の遺物についても、その関係を再検討すべきとの認識を得た。

加えて、近年、韓国において、古墳の発掘調査が進展し、加耶地域を中心に各地で関係資料の発見が相次ぎ、また、中国東北地方においても、4~5世紀の三燕時代の墳墓が多数発掘され、多量の金属製品が出土したことにより、韓国の資料も検討の対象に含めた日中

の墳墓副葬品を中心とした比較研究を行いうる状況が整った。

２．研究の目的

日本における弥生時代、古墳時代の墓から出土する装身具類や武器・武具、馬具等の金属製品には、中国や韓国からもたらされたもの、あるいはそれを模倣したものがある。これらの渡来系遺物のいくつかは、従来から、漠然とではあるが、朝鮮半島、さらには中国の東北地方、あるいは中原地域等にその源流があると考えられてきた。近年、朝鮮半島や中国東北地方における発掘調査の進展により良好な資料の発見が相次ぎ、中国・韓国・日本の関連資料の比較研究が急務の課題となってきている。

本研究は、日中の墳墓副葬品の比較研究をテーマとするものではあるが、韓国も検討の対象に加え、３地域における金属器の比較研究を通して、日本の渡来系遺物の源流と伝播経路を明らかにすることにより、そこに見られる文化交流のあり方を解明しようとするものである。本研究では、日中の墳墓出土品を総合的に分析・考察するにとどまらず、地理的にも文化的にも両国の間にある韓国の資料も含めて研究を進める。そのことにより、当時のヒトとモノの動きをより鮮明に捉えることができるであろう。

３．研究の方法

本研究は日中両国の研究者が共同で調査し、比較研究をおこなうことを基本とし、中国の資料としては、近年、関連資料が質的、量的に充実しつつある中国東北地方を主たる対象とする。さらに、日中の比較研究ではあるが、出発地点－中間地点－到達地点、という視点から、地理的に日本と中国東北地方の間に位置する韓国についても比較研究の対象とし、以下のように進める。

（１）中国東北地方の遼寧省は、地理的に遼西と遼東に分けられるが、近年、鮮卑族の墳墓（３～5世紀）が継続的に発掘調査されている遼西地域を中心に資料調査をおこない、収集した資料については、逐次データベース化を図る。

（２）日中の文化交流がより盛んになる6～7世紀の墳墓出土資料についても比較検討し、資料収集を行う。

（３）資料収集は、現地に赴いての遺物の観察、実測、写真撮影を中心とする。

（４）墳墓出土遺物の製作技術等の検討にあたっては、双方の研究者が共同でおこなうとともに、可能な限り、蛍光Ｘ線分析等の理化学的分析も行う。

（５）日本及び韓国の資料については、既存データの見直しとともに、新資料の追加を行い、あわせて収集した資料のデータベース化を進める。

（６）日中韓の墳墓に関する文献を収集する。

（７）収集した４～７世紀を中心とした墳墓出土資料について、データの質的な向上を図るとともに、日中韓の資料の比較検討を行い、研究を総括する。

４．研究成果

近年、中国東北地方において発掘調査がおこなわれた墳墓の副葬品は、日本の古墳から出土する渡来系遺物や外来的要素の源流を追究するにあたっての重要な手がかりとなるものであった。日中の墳墓から出土する関連遺物について、韓国の資料も加えて検討した。

（１）５世紀代の古墳には、それまでになかった新しい副葬品が納められるようになる。その一つである馬具について、鞍金具の外観、金銅装の例にあってはその装飾文様や技法等、さらには、鞍橋木部が遺存する例についてはその構造について、韓国の出土例も含めて検討した。特に鞍木部の構造と製作手法については、左右２枚で構成し、中央部を斜めに削いで接ぎ合わせ１枚の鞍橋とする共通する作り方を確認することができた点は、技術の系譜関係を考えるうえで、きわめて重要である。馬具は轡、鐙、杏葉等も含め、基本的に一式として製作されていると見做せることから、日本の古墳時代の初期の馬具は、主として、４世紀初頭、遼西地域の三燕文化の馬具が遼東地域の高句麗に流入し、高句麗を経て朝鮮半島南部の新羅、百済、加耶地域に伝わり、それが5世紀初頭に朝鮮半島南部を経由して日本に入ってきた蓋然性が高まった。さらに、鞍金具をはじめとする鉸具についての検討結果も加える等、総合的に分析することにより、一例をあげれば、藤ノ木古墳出土馬具の系譜は、高句麗と密接に関係している可能性を指摘しうるにいたった。

（２）次に、５世紀第２四半世紀に出現する騎兵装備は少し事情を異にしている。中国東北地方において４世紀に成立した騎兵装備のなかで、ヒトが着用する鎧は、漢代にあった2種の鎧甲のうち、鞆形あるいは楕円形に近い小札を用いた鎧甲ではなく、細長い長方形の小札を用いた鎧甲の系譜につながることが明らかとなった。また、高句麗も含めた中国東北地方においては、この時期の馬甲・馬冑の存在も知られていることから、人馬ともに甲冑を着用した重装騎兵が成立していたことは明らかであろう。この騎兵装備は、朝鮮半島南部では４世紀代に確認できるが、重装騎兵の出現は、５世紀初頭と時期がやや降る。

ヒトの冑に関しては、中国東北地方で出土した例には、椀を伏せた形をしたものと、い

わゆる蒙古鉢形のものがあるが、朝鮮半島においても2種の形態のものが出土しており、年代観やその形状の類似性等からみて、朝鮮半島出土例の源流は中国東北地方にあるとみなしうるのであり、さらにいえば、朝鮮半島における馬甲・馬冑の出土も考慮すれば、重装騎兵の装備としてもたらされた可能性が高いといえよう。また、朝鮮半島出土の甲冑では、鉄板を結合するのに、鋲ではなく釘で留めている例があるが、中国東北地方で出土した冑においても、釘結技法が確認される。こうした点からも、両地域の密接な関係を窺うことができよう。

騎兵装備は、朝鮮半島を経由し、5世紀の中葉以降の日本列島において、その存在を確認することができるのであるが、騎兵装備の鎧甲と同一の系譜にある挂甲が普遍的に出土するのに対して、馬甲・馬冑の出土は各2例しかなく、その出現も５世紀後葉を遡りえない。日本で重装騎兵は普及しなかったと考えざるをえないのである。また、中韓で密接な関係を指摘しうる冑についても、日本での類例の出土は極めて稀である。朝鮮半島南端において確認された重装騎兵の装備のなかで、挂甲のみが多量に出土している点に、日本における当時の情勢や受容の事情が反映されていると考えられるのである。これは、当時、日本においては、重装騎兵による戦いを必要としなかったことを示すとともに、騎兵装備が騎兵戦という戦闘方法と一体のものとして取り入れられたのではなく、単により性能の高い新しい武装として導入されたことを物語っているのである。

これに対し、攻撃用武器のなかでも普遍的な鉄鏃については、鏃身の形態を中心に比較検討し、多様性に富む日本の出土例のなかでも、５世紀第２四半世紀以降普遍化する長頸鏃において、日中韓においてかなりの共通性を見出すことができた。

（３）５世紀に普遍化する新しい副葬品として金銅製品、鉄地金銅張製がある。その製作には、鍍金技法によるものと金薄板技法によるものがある。タガネ彫文様や透彫文様を伴う華麗な製品であるが、国産化が始まったと考えられる５世紀中頃を中心とする古墳出土例では、鍍金－タガネ彫－透彫、という製作工程が確認されている。中国の製品においても、透彫、タガネ彫の手法も含め、金薄板を用いる技法が確認された。また、中国出土例について、蛍光Ｘ線分析をおこなった結果、金銅製の馬具・帯金具は、銅もしくは錫分の少ない青銅に鍍金を施したものであることが判明した。これは、素材となる金属の成形さらにはタガネ彫や透彫を施すことと関係しているのであり、古墳時代における金銅製品の製作技術が、これらと同一の系譜関係にあるとする推定の妥当性を裏付けるものである。

（４）上述してきたような関連性が認められる一方で、三燕文化や加耶の墓制は、日本の古墳と異なり、墳丘を伴わない木槨墓や石室墓、磚室墓である。また、生産形態は、それぞれの気候風土によって大きく異なってくるものであるが、斧、鋤、鍬のような生産用具類について検討すると、その器種や出土量の多寡は、日本では水田耕作を主とするのに対し、中国東北地方では畑作が主であることを如実に示している、というように、それぞれの独自性を示している。

（５）文献等からも日中の交流が窺える６～７世紀の隋唐墓から出土した俑には、大別して焼成による陶俑と乾燥による泥俑がある。それらの製作技法を検討した結果、同じ笵から作られた俑にあっても、「工人のくせ」とでもいうべき違いを見出すことができたことから、一定量以上の数を必要とする同笵俑の製作にあたっては、複数の工人が関与している状況を想定することができるであろう。また、銅線を芯にして制作している例は、韓国や日本の塑像と同じ製作手法といえる。さらに、韓国の塑像に関しては、その制作に焼成法と乾燥法があることも注意しておくべきであろう。

３次元デジタイザで
取得した陶俑のデータ

製作技法の検討に加えて、釉や加彩のある俑に使用された顔料等について元素分析をおこなった結果、顔料としては、水銀朱、鉛丹、鉛白、墨、さらには銅を用いていることが判明した。また、加彩俑にあっては、彩色の下地に鉛白を用いる場合があることも明らかになった。一方、頭部、胴部等それぞれを笵を

用いて成型した後、各部を組み合わせて製作する人物俑等の同笵関係の有無に関しては、非接触３次元デジタイザによって取得したデータを活用することにより、より確実性の高い結果が得られ、遠隔地の資料についても比較検討しうるとの見通しを得た。
（６）日本の墳墓副葬品にみられる外来の製品、あるいは源流が主として中国等に求められる製品については、直接的に日本列島にもたらされたもののほかに、高句麗や朝鮮半島南部を経由したと考えられるものがあったことが明らかになった。前者は同工の製品が日中で出土しているもので、中国中原地域との結びつきを示す鏡や帯金具等である。後者には、中国東北地方から高句麗の一帯を源流とし、朝鮮半島南部を経由してきたと考えられる馬具や騎兵装備である。後者のなかでも、５世紀の日本列島に出現した騎兵装備は、基本的に馬甲・馬冑を欠いていた。この重装騎兵の欠如は、中国や朝鮮半島の石城や土城、あるいは高句麗古墳の壁画に描かれたような、高い城壁や土塁で囲まれた防禦施設が存在しないという、日本の事情を反映したものであった。したがって、騎兵装備を構成する武器・武具や馬具の類は、日本列島内の戦いに向けて、より性能の高い装備として導入されたのであり、また生産されたと考えられるであろう。そこには必要なものを取り入れる、という受容する側の状況を窺うことができるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）
①豊島直博、古墳時代の剣装具、王権と武器と信仰、642・657、2008、査読無
②豊島直博、古墳時代前期の刀装具、考古学研究 54－1、68・88、2007、査読有
③和田一之輔、初期の石見型埴輪２例と小穿孔、古文化談叢 58、139・158、2007、査読有

〔学会発表〕（計　１件）
①金田明大、瓦礫に花を咲かせましょう、第 1 回 文化遺産のデジタルドキュメンテーションと利活用に関するワークショップ、2007 年 9 月 27 日、東京大学

〔図書〕（計　１件）
①金田明大・黒崎直・小林謙一ほか、奈良文化財研究所、東アジア考古学論叢－日中共同研究論文集－、386、2006

６．研究組織
（１）研究代表者
花谷　　浩（HANATANI HIROSHI）（2005）
独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・飛鳥藤原宮跡発掘調査部・遺構調査室長
研究者番号：70172947
金田　明大（KANEDA AKIHIRO）（2006～2008）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター・主任研究員
研究者番号：20290934

（２）研究分担者
小林　謙一（KOBAYASHI KENICHI）（2005～2008）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・企画調整部・部長
研究者番号：70110088
金田　明大（KANEDA AKIHIRO）（2005）
独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・飛鳥藤原宮跡発掘調査部・研究員
研究者番号：20290934
小池　伸彦（KOIKE NOBUHIKO）（2005～2007）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・企画調整部・企画調整室長
研究者番号：90205302
高妻　洋成（KOHDZUMA YOHSEI）（2005～2007）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所･埋蔵文化財センター･保存修復科学室長
研究者番号：80234699
豊島　直博（TOYOSHIMA NAOHIRO）（2005～2007）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員
研究者番号：90304287
和田　一之輔(WADA KAZUNOSUKE)(2006･2007)
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所･都城発掘調査部・研究員
研究者番号：40416409
黒崎　直（KUROSAKI TADASHI）（2005～2007）
富山大学・人文学部・教授
研究者番号：6000494

（３）連携研究者
小池　伸彦（KOIKE NOBUHIKO）（2008）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・企画調整部・企画調整室長
研究者番号：90205302
高妻　洋成（KOHDZUMA YOHSEI）（2008）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所･埋蔵文化財センター･保存修復科学室長
研究者番号：80234699
豊島　直博（TOYOSHIMA NAOHIRO）（2008）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号：90304287
和田　一之輔（WADA KAZUNOSUKE）（2008）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所･都城発掘調査部・研究員
研究者番号：40416409
黒崎　直（KUROSAKI TADASHI）（2008）
富山大学・人文学部・教授
研究者番号：6000494

（４）研究協力者
田　立坤（TIAN LIKUN）（2005～2008）
中国・遼寧省文物考古研究所・所長